



赤とんぼ通信 NO.1



2006年6月3日

シンドラ社製エレベーター事故発生

当時、高校2年生 市川大輔^{ひろすけ}君の命が奪われました。

なぜ、事故は起きたのか？

市川大輔^{ひろすけ}君のご家族を支援し、共に原因究明を求めています。

赤とんぼの会

私はあの日まで、エレベーターは安全な乗り物だと信じていました。しかし、平成18年6月3日、「シンドラー社製エレベーター」によって16歳の息子の命を奪われました。エレベーターの扉が開いたまま突然急上昇したのです。

あのエレベーター事故からもう2年もの月日がたちましたが、未だに中立な機関による事故の原因究明がなされていません。この事故にあって初めて知ったのですが、事故調査する機関がなかったのです。

私達はこの2年、何故エレベーターによって息子の命が突然奪われてしまったのか、何が本当の事故の原因なのか、中立な立場の事故の調査機関を設置していただき、徹底的に事故の実験調査をしていただきたいと訴えてきました。しかし、「原因究明をするところではない」「警察が証拠品をすべて押収し調査している」と冷たく言われて悔しい思いばかりしてきました。そこで、「国交省・東京地方検察庁・警察庁」に赤とんぼの会と多くの皆様の協力で集めた13万人署名と要望書を提出し訴えました。しかし、原因究明は未だになされていません。

また、事故の本当の原因究明が利用者の安全向上に繋がると考え、(社)日本エレベーター協会に事故の原因究明調査の協力をお願いし、会員であるシンドラー社側に謝罪と説明を求めて欲しいと、協会側をお願いいたしました。しかし、エレベーター協会側の返事は、協力的な返事とは感じられませんでした。

事故の原因究明が進まない状態の中、エレベーター業界関係者にもお会いし、事故についての意見をいただきたいと伝えましたが、「警察に協力をしているから」「業界のしがらみが・・・」と口を閉ざしてしまいました。

私達は、この2年間、製造元であるシンドラー社側から事故の説明と謝罪を未だに一度も受けていません。一人の人間の命が、エレベーターによって奪われているにもかかわらず、謝罪をすることもしないのです。苛立ちと怒りと不信感が大きくなりました。

国交省はこの事故を受けて、全国のシンドラー社製エレベーター8,834基の不具合を調査し、1基あたり1ヶ月の不具合発生率1.7%、大手5社の1.2%に比べて、不具合率は大きな違いなし、構造上問題なしと発表しました。

しかし、シティハイツ竹芝の「シンドラー社製エレベーター」の不具合の数字は、誰に聞いても異常だといえます。全国の統計とは別なのです。違うのです。

また事故の後、港区の平成15年4月2日から平成18年5月26日までの「シティハイツ竹芝 過去のエレベーター不具合一覧」では43件(4号機・事故機)と報告されました。

しかし住民アンケートでは、回答39世帯の9割近くの人が故障に遭遇し、7割の人がシンドラー社自身が保守点検を行っていた当時から、不具合があったと回答しています。このアンケートを裏づけるのが、事故機が警察に押収撤去されたあとも、同種のエレベーターである4号機の不具合がつづいたことです。平成18年7月12日から11月8日までの4ヶ月弱で、21件もの不具合がありました。その不具合は、「閉じ込め・段差・異常音・振動・ドア開かず・停止以外の階に停止・ボタン操作していないのに昇降・下降を操作しても上昇」と、事故機の不具合と同じようなものでした。

私は、息子を殺されたと思っています。事故は防げたと思っています。それは、これだけの不具合に対し、きちんと対処・対策・修理・情報報告をやっていれば、防げたからです。また、製造元のシンドラ社は事故の4ヶ月前に、事故機エレベーターの不具合が一日に何件も出たために、平成18年2月3日・6日、点検修理にきています。このときに事故機を点検しています。これだけの異常な不具合、住民の港区への訴えがあったのにもかかわらず、何故事故を防ぐことができなかつたのかと思います。

エレベーターの戸開走行は死亡事故に直結する危険があるからこそ、建築基準法で戸開走行を発生させない安全装置の設置が義務付けられています。それにもかかわらず、シンドラ社は、1990年~1993年にかけて制御プログラムにミスがあり、戸開走行が発生するエレベーターを供給したのです。それ自体大問題ですが、さらに問題なのは、平成5年にこのミスを把握したにもかかわらず、当時、既に供給されていた49基のエレベーターについて修正プログラムへの変更を行ったが、工事中であった3基及びその後のエレベーター改修時に誤って古いプログラムを再インストールした6基、計9基において戸開走行が発生する可能性があり、直ちに改修プログラムへ交換したとしています。

シンドラ社は、国交省への報告も公表もせず、今回の事件発生後の平成18年6月16日になって、ようやく国交省に報告したということです。それだけでなく、その当時工事中であった3基については、プログラムの変更も行なわないまま、10年以上も放置していたのです。また、エレベーターの法定検査を行なう53人が資格を不正取得していたということも明らかになっています。

安全とは何なのでしょう。利用者の命を守るために事故の原因究明、対策、検討を行ない、製品管理を徹底する組織の姿勢こそが、二度と同じような事故を起こさないことに繋がるのではないのでしょうか。

エレベーターは多くの人利用する私達の生活の身近にある乗り物です。小さい子供からお年寄りまで、ボタン一つで移動できる乗り物です。その乗り物であるエレベーターの安全基準、「扉が開いたままエレベーターを移動させない」という最低の安全基準を破っているのがこの事故です。二度と同じような事故を起こして欲しくない。その思いをもとに、息子の仲間たち、そのお母さん方が結成してくださった小山台高校野球部の赤とんぼの会の皆様とともに訴え続けていきます。

市川 和民・正子

シンドラーエレベータ株式会社製エレベーター事故の現在までの経緯と状況

2006年6月3日、「シティハイツ竹芝」(東京都港区芝1丁目8番23号)において、シンドラーエレベータ株式会社製エレベーターの扉が開いたまま上昇し、それによって市川大輔君(当時16歳)が死亡するという重大な事故が発生しました。

安全であると信じていたエレベーターで、何故命を失うことになってしまったのか、事故からもう2年が経過しているにもかかわらず、未だに中立な立場の調査機関での徹底した調査による事故原因の解明はなされていません。

市川大輔君の命を無駄にしないためにも、二度とこのような悲しい事故を起こさないためにも、全面的な事故原因の徹底解明と、刑事責任の厳正な解明を要請するため、署名活動を行いました。現在は、事故原因を解明して、責任を明らかにする取り組みの費用とするための募金活動を始めました。

赤とんぼの会(平成19年度小山台高校野球班3年保護者の会) 代表 三枝 香奈子

年月が経過した訳

市川大輔(ひろすけ)君がエレベータの事故にあったから、2年経過しました。

その間にご遺族は何もしなかったわけではありません。弁護士をたて、事故から3年以内に裁判を起こさなければならないのですが、実は立件することすらできない状況でありました。

警察の対応

事故が起きた5号機エレベータの全てを押収し、事故後の調査はしています。

しかし、警察は本当の原因を解明する機関でないとご遺族側には伝えてきています。

事故機の製造元：株式会社シンドラーエレベータの対応

情報の提供をすることもなく、一切協力もなく、ご遺族側に直接会って、本当の事故原因を説明することは一度もありません。また、港区の事故調査委員会が同委員会への出席を求めても拒否し、シンドラー社からの逆提案として委員会参加者を港区とシンドラー社の上層部に限定すること、事故原因に対する質問には回答しない、会談内容の非公開を求め、挙句の果てには“情報が欲しければスイスに來い”という対応です。

公社の管理主：港区の対応

独自に事故原因を解明しようと検討委員会を設け第一次、第二次報告書を作成し、平成20年3月末には第三次報告書を提出する予定と聞いております。しかし、事故が起きた公社の管理責任者であるため、中立的な立場からかけ離れ、偏った見方になっていないか懸念するところであり、第三者の立場による報告書の正当性を打診しなければなりません。また、証拠物件による実証実験ができていない状況から、株式会社シンドラーエレベータの協力は欠かせないのですが、前述したように非協力的であるため進展していません。

管轄官庁：国土交通省の対応

3回ほど国土交通大臣に面会を申し出ました。残念ながら面会できたのは1回だけでした。国土交通省は、エレベータに対して厳格な安全基準(飛行機や車など乗り物に匹敵するような)を確立するための検討機関は設けていません。

建築基準法にも記載されているように、エレベータの扉が開いた状態での走行は『絶対にあってはならない事』です。ですが、起こってはならない事が実際に起きたことで、大輔君の命は奪われてしまいました。これは、絶対にうやむやにする事はできないことであり、それをあいまいにすることは大輔君の命を無駄にする事になります。

事故の本当の原因究明がなされなければ今回の事は解決しません。そして、このような事故を二度と起こさないためには、国土交通省に中立的な『事故解明調査機関』を設け、事故の原因解明と再発防止のためのエレベータの基準の見直しを行い、戸開走行が二度と起きないようにすることが必要です。私たちはこのことが、エレベータを利用する利用者の安全の向上に繋がると信じ、訴えつづけていきます。

署名を募った結果

事故が何故起きたのか、国土交通省に中立の『事故解明調査機関』を設け、事故の原因解明と、エレベータの基準の見直しを確立し、戸開走行が二度と起きないようにする事が、利用者が安全で安心できるエレベータにつながると信じ署名活動をし、事故から2年が経過した平成20年6月3日に請願書を提出いたしました。

国土交通大臣殿	138,814名
東京地方検察庁検事正殿	132,789名
警察庁長官殿	134,256名

募金活動を始めます

事故の再発防止には、徹底的な原因究明が不可欠であります。そのためには、今回の事故を徹底的に原因究明し、二度と同じような事故を繰り返さないための対策及び研究を行い、私たちの生活に身近なエレベーターが安全に利用できることを保障する『エレベーター安全委員会』等の『事故解明調査機関』の設立を願っています。

いつも利用するエレベーターの安全を守るために、事故原因と法的責任の解明など『安心で安全なエレベーター』にするための取り組みが必要です。事故原因を解明して、責任を明らかにする取り組みの費用とするための募金に、皆様のご協力をお願い致します。



多くの方々の賛同を頂き、心より感謝いたします。

この署名と募金を支えに『事故解明調査機関』の設立と、事故の原因究明を訴えていきますので、

何卒、ご理解、ご協力のほど、お願い致します

2年間の主な活動内容

年 月 日	活 動 内 容	
2006年	11月14日	警視庁・検察庁に要請書
	11月21日	港区議会議長・港区区長に要請書
	11月24日	国土交通大臣に要請書
	11月27日	内閣総理大臣・国土交通大臣に要請書
2007年	2月13日	検察庁・警視庁に要請書
	2月15日	国土交通大臣に要請書
	2月20日	港区区長に面談
	2月26日	国土交通大臣に面談
	9月21日	検察庁に要請書面談
	12月18日	警視庁に要請書
	12月末日	署名活動開始
2008年	1月8日	街頭署名開始 武蔵小山駅周辺にて(160名)
	1月12日	第2回街頭署名 武蔵小山駅周辺にて(683名)
	1月27日	第3回街頭署名 大井町駅周辺にて(1000名)
	2月10日	第4回街頭署名 大井町駅周辺にて(1149名)
	2月27日	第5回街頭署名 お台場駅周辺にて(362名)
	2月29日	東京地方検察庁検事正殿に3万名分の請願書を提出
	3月9日	第6回街頭署名 お台場駅周辺にて(586名)
	4月6日	第7回街頭署名 川崎駅周辺にて(749名)
	4月20日	第8回街頭署名 蒲田駅周辺にて(982名)
	5月4日	第9回街頭署名 蒲田駅周辺にて(1388名)
	5月18日	第10回街頭署名 武蔵小山駅周辺にて
	6月3日	国土交通大臣殿 東京地方検察庁検事正殿 請願書提出 警察庁長官殿
	そのほかに	
		消防署に事故の説明を要請面会
		スイス大使館に文書で心情を訴え

「市川 大輔君の記録」

市川^{ひろすけ}大輔プロフィール

【生年月日】平成元年12月12日生

【スポーツ歴】

保育園から小学校低学年生までサッカー

小学校低学年から小学校6年生までバレーボール

小学校4年生から中学校3年生まで軟式野球（東京サニーズ）2塁手

中学校（御成門中）野球部 捕手

平成17年都立小山台高校入学 野球部入部

【将来の夢】中学校の先生

市川^{ひろすけ}大輔君が残した最後の日誌は、野球を通して「生きる」ことをはっきりと伝えるものでした。でも、あの悔やまれる事故に遭い16年という短い人生となってしまったのです。

彼は、野球をこよなく愛し、自分に厳しく、そして周りの人々へ気遣いができるとも優しい青年でした。

【最後の日誌】

2006年5月27日（土）

今日で試験も終わり、今日はほぼ二週間ぶりとなる練習だった。雨でグラウンドが使えないことがとても残念だった。ただ室内練習にしても自分は試験前の力を持続しようと思っていたけれど、シャトルはバットが重く感じられたし、特に補強系では自分の体の重さを実感した。日ごろから文武両道として自分のすべきことをこなせていなかったから、試験前に集まり、結果、トレーニングの時間も少ししか取れなくなっていった。これではいけないと思う。与えられた時間は皆同じなのだから、その時間をいかに有意義に使うことかだと思う。そして、それが本当の意味での文武両道につながってゆくと思う。夏の大会前には、合唱コンクールがあり、期末テストがある。今回の自分のようにテスト後の練習で、調子を取り戻そうとしているのでは実力の向上は望めないし、それではだめだと思う。

夏までもう時間がなくなってきた。いかに自分に厳しくできるかが一日を生きるのに大切なことだと思う。限られた一日という時間を他人に優しく自分に厳しくできるように、そしてその一日が有意義であるようにすごして行きたいと思う。

ついに夏まであと少しとなった。この時期怪我が一番怖い。特にレギュラー人は夏出るのだから気をつけてほしいと思う。今、KさんとMさんが怪我をしているけれど、早く治して万全な常態で試合に出てほしいと思う。そしてそういった環境をつくるのが1年、2年など試合に出ない人たちの役目であり、それも1つの全員野球だと思う。

安心するくらしのために、 安全基準の厳格化を・・・



2006年夏 市川大輔君(いっちゃん)が出場するはずだった大会
その球場にたくさんの赤とんぼが飛んでいました。

その時以来、どんな練習場所にも必ず小山台が練習する
グラウンドには赤とんぼが・・・

それは、きっと「いっちゃん」
いつも、いっちゃんが見守っていてくれる。
そう思わずにはいられない！
そんな大切な絆の証 「赤とんぼ」

2007年12月1日 赤とんぼの会 発足

市川大輔君が所属していた小山台野球班の同級生とその保護者で構成され、
亡き市川君のご家族と結束した会です